

12月はホリデーシーズン。7日には米国ユダヤ人委員会（AJC）のハヌカ祝賀行事に、23日には日系人コミュニティの餅つきに、24日には近所の方の御自宅でのクリスマス・ディナーに招いて頂いた。クリスマスを迎える近所の装いも楽しげだ。シカゴ美術館も初めて訪れた。



クリスマスを迎える近所の装い シカゴ美術館にて（日本政府による寄付）

1 シカゴ定住者会（JASC）の「ホーム」

JASC（Japanese American Service Committee）は元々、1946年、強制収容所からシカゴに辿り着いた日系人の住宅や仕事などのニーズに応える目的で Chicago Resettlers Committee（シカゴ定住者会）として設立された。高齢者向け住宅「平和テラス」を含む社会福祉サービスの提供から、日本語や日本文化・伝統の継承、日系人の歴史や遺産の保存・継承等を担っている。日系人コミュニティに不可欠の存在。

12月1日、そのJASCの新しい拠点となる建物のフルリノベーションのキックオフ式典が行われた。現在の構成員だけではなく、今後何世代にもわたって日系人コミュニティの「ホーム」となっていく場所。ここに至るまで長年の時間を要したと聞く。異なる背景、異なる世代の人々が幅広い活動を展開している。いろいろなアイデア、必要性、夢がある。予算的制約、法的規制、技術的課題もある。喧々諤々の議論を通じて、「何をしたいか」「どう過ごしたいか」「どうあるべきか」、突き詰めて考えたのではないか。様々な条件や思いを受け止め、デザインの力で図面に落とし込んで建築空間を生み出す大役は、日系人女性建築家の手に委ねられている。

19日、シカゴ日系コミュニティの中で存在感を示すお一方に対する叙勲伝達式。友人ご夫妻やご家族に祝福される中、会場は温かい空気に包まれた。日系米国人の方々は、米国における様々な日系組織やコミュニティとの連携・連帯を通じてその存在感を高め、日米間の相互理解に大きく寄与している。



JASC新ホーム改築のキックオフ

叙勲伝達式

2 「Nikkeijin Illinois」と「日本館」

2日、イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校で2月から開催されてきた「Nikkeijin Illinois」展を視察。イリノイ大学関係者である10人の日系人個人のストーリーに焦点を当てつつ、それを通して、Nisei（2世）、Sansei（3世）、Kibei（帰米）等の方々が直面した状況、時代背景や歴史のうねりを浮かび上がらせる見事な構成。自ら Yonsei（4世）としてパネルの最後に展示されているキュレーターご自身に、案内・説明頂いた。そのクロージング「Woman Warrior」では、4世代にわたり日系人女性がいかに差別と闘ってきたかをシラカワ氏が物語風に語る。日系人を巡る歴史は、学べば学ぶほど、複雑で多面性があり、多くの知らないことがあることに気付かされる。

展示されている Nisei（2世）のお一人の配偶者で、同校「日本館」の館長を務められていた方と懇談。茶室、日本庭園、講義室、展示室を備えた日本館を通じて、大学や地域に茶道、華道、着物などの日本伝統文化を発信してきた。この類の施設は米国本土に他にはないと聞く。来年5月に25周年を迎える。



「Nikkeijin Illinois」展の様子

イリノイ大学の日本館

3 ラングストーン・ヒューズ小中学校

1999年、小渕総理がシカゴを来訪した際、空港出迎えの一人に、花束を持って日本語で歓迎の言葉を述べた少女がいた。シカゴ南部にあるラングストーン小中学校の生徒の一人。当時から同校では生徒全員が日本語を学んでいる。当時の校長先生と日本語教師の方は引退されているが、現在は一人の日本人の日本語教師の方が引き継いで奮闘している。

この日本語教師の方は、隣校でも日本語を教えており、両校の校長先生と生徒9名と合計12名で日本を訪問するという。国会訪問、浅草、原宿、岩手県訪問、コンビニ、東京ディズニーランドなどの日程。ある日本在住の方が、同校生徒の毎年の日本訪問を支援している。

12月5日、同校を訪問し、日本語での自己紹介や日本の学校訪問の際に披露する予定のダンスなど、訪日を控えた勉強と練習の成果を披露して頂いた。日本語教師の方、校長先生と学校関係者、日本訪問というインセンティブを毎年プレゼントして下さっている日本在住の方。日本語教育が支えられている一つの現場に勇気付けられた。



ラングストーン小学校にて

4 世界で評価されるパブリック・ディプロマシーの成功物語

12月8日、公邸でJETプログラム帰国者レセプションを開催。JETプログラムは日本の学校で語学指導などを行う外国青年招聘事業。JET参加中に日本で知り合って結婚に至るといったカップルもいた。

20年以上前の本省勤務時代。JETプログラムに参加したOBOGを、日本の応援団として組織化するためにアフターケアに力を入れた。それまで、毎年1回、北米で開催されていたJET同窓会の国際総会を「里帰り総会」として初めて日

本で開催し、外務省飯倉公館で外務大臣主催のレセプションも開催した。JETは、パブリック・ディプロマシーの成功物語として世界でも評価されている。

その後「里帰り総会」は継続されていないようだが、2024年米国総会は、当館管轄のミネソタ州 JETAA（元参加者の会）主催で行われる。



J E T 帰国者レセプション

5 日米関係を支える基盤 ～ 日系企業と日米協会

12月14日、車で2時間弱、ウィスコンシン州ウォルワースに設立50周年を6月に祝ったキックマン工場を訪れた。地元コミュニティとの融和、共存、共栄を目指し、米国企業になり切ろうと努力する日系企業の「先駆け」「成功ロールモデル」として日米双方で高く評価されている。従業員と地元で愛されている様子が実によくわかる。

シカゴ市内戻り、シカゴ日米協会のホリデーファンドレイジング・忘年会に夫妻で出席。全米各地にある日米協会は、日米関係を草の根で支える最も頼りになるパートナーの一つ。その中でも、シカゴ日米協会は90年以上の歴史を誇る。会長に誘われて、全テーブルを回って参加者の皆様と記念撮影に収まった。私の挨拶の中では、オスプレイ墜落事故で亡くなられた8名の乗員の方々に対して、全員で黙祷をもって哀悼の意を捧げた。日本と地域の平和と安全のために日夜任務に励んでいる在日米軍関係者に感謝と敬意を表しつつ。



ウォルワースのキッコーマン工場

日米協会の晩餐会

6 音楽演奏を通じて心と心が繋がる

12月17日、毎年12月にシカゴ現代美術館で行われている「太鼓レガシー」コンサートにご招待頂いた。太鼓を通じた日本の文化伝統の継承とともに、地域の日系・アジア系コミュニティの発展に尽力している司太鼓にとって最も重要な公演。日本の和太鼓文化は、米国の西海岸から日系人の和太鼓演奏を通じて全米、世界に広がり、世界の和太鼓文化になったという。

12月21日、日本で最も長い歴史と伝統を誇る交響吹奏楽団であるオオサカ・シオン・ウィンド・オーケストラによる「ミッドウエスト・クリニック」招待演奏に招いて頂いた。毎年12月にシカゴで開催される「ミッドウエスト・クリニック」は、世界一流の指揮者、指導者、演奏家などが集う吹奏楽の祭典、世界一の「勉強会」。大阪シカゴ姉妹都市50周年記念行事のフィナーレを飾り、次の50年間に向けた前奏曲にもなるだろう。



司太鼓の皆様と

オオサカ・シオン・ウィンド・オーケストラ

7 再びミネソタ州へ、ウォルズ知事と会談

12月21日、ティム・ウォルズ・ミネソタ州知事（民主党）と会談。同知事

は民主党知事会会長にも選出されており、全国的知名度も高めている。知事としての初外遊が日本で、日系企業の貢献に対して高い評価をお持ちだ。ミネソタ州は、少子高齢化に直面している中で労働力開発や、グリーン・スチール等の気候変動対策に力を注いでいるという。

前日には、近郊のブルックリンパーク市に所在するタケダとオリンパスを市長と一緒に視察。日系企業の貢献に対する地元の理解を深めると同時に、双方向の貿易投資機会の拡大を目的とする「草の根キャラバン」を再始動した。



ウォルズ知事との会談

地元市長と一緒に日系企業にて